

【中学校の部・最優秀賞】

爆発しなかった爆弾

石垣市立石垣中学校
三年 新城 大地

僕の曾祖父は今年百一歳になった。

百歳の敬老の日に、満面の笑顔で頌状を頂いた。その笑顔は、曾祖父が百年間生き抜いた様々な喜びや苦しみを包みこんでいるかのようにだった。

十四年しか生きていない僕は、百年という人生は曾祖父にとつてどのようなものだったのだろうか、と考えずにはいられなかった。「家の庭に爆弾が落ちたんだよ。だが、爆発しなかった。」

いつも曾祖父が話していたことが心の中に思い浮かんだ。

爆発しなかった爆弾のことを初めて聞いたのは僕が小学校二年生の頃だ。そのときは、曾祖父の話をなんとなく聞いていたのかも知れない。命の大切さなんて深く考えることもなかった。しかし時を重ね、毎年六月二十三日になると、この曾祖父の話を思い出し、そして「爆発しなかった爆弾」は今の僕が存在するための重要なできごととなった。

曾祖父は、祖母が生まれた昭和十六年に家族をつれ、宮古島から福岡県の大牟田の炭鉱に働き出た。やがて戦争が始まり、激しい空襲の中、家族を連れて逃げ出せずにいると、爆弾が家の庭に落ちた。「もうだめだ」と思ったが、その爆弾は爆発しなかった。油が噴き出し、青色だったという。その後、家族を連れ、兄弟のいる飯塚へ着の身着のまま逃げた。

戦争が激しくなる中、飯塚の炭鉱で働いていると、とうとう曾祖父にも赤紙がきてしま

った。しかし、戦場に向かう間もなく終戦となり、戦場へ行かなくて済んだのだ。

曾祖父は二度も命拾いをしたのだ。

その後、宮古島へ引き上げ、新天地を求め石垣島に琉球政府の計画移民としてやってきた。木がうつそうと茂った場所を開拓するのは過酷なもので、苦労は絶えなかったそうだ。しかし、二度も救われた命。命があるのは宝だと自分にいい聞かせ、歯を食いしばり頑張った。生きていけると言うことは幸せなことなんだと思いつつながら。

やがて僕の母が生まれた。初孫である。爆発しなかった爆弾のおかげで、命は受け継がれた。そして曾孫である今の僕がいる。

戦後六十五年たった昨年。あの激しい地上戦のあった糸満市で道路工事中に不発弾が爆発した。戦争は終わっているのに、まだ爆弾は六十五年の年月を経て爆発している。僕の心の中に、「爆発しなかった爆弾」が重くのしかかった。

太平洋戦争で残された不発弾は沖縄県で約二千三百トン埋まっていると推測されている。基地の近くにある小学校はいつでも爆弾を抱えているのだ。戦争が終わっても、戦争の恐怖から逃れることのできない苦しみの中にいる僕たち。僕の心の中の「爆発しなかった爆弾」はいつしか「平和」への願いに変わった。

中学二年の校内合唱コンクールで、僕たちのクラスは「HEIWAの鐘」を合唱した。「ぼくらの生まれたこの星に奇跡を起こしてみないか 拳を広げてつなぎゆく心は一つになれるさ 平和の鐘は君の胸に響くよ」僕はピアノを伴奏しながら「爆発しなかった爆弾」のことを考え、平和への願いを強めた。そしてこのメロディが世界中に響くよう

に力を込めて弾いた。

月の探査機かぐやから映し出される青い地球。人類の争い事などちっぽけなことだと考えさせられる。しかし、僕たち一人一人の命がいつまでも受け継がれますようにと願わずにはられない。

オバマ大統領は、核爆弾を根絶する約束をし、ノーベル平和賞を受賞した。

全世界の人々が一人の発言に賛同して平和を求めれば、青い地球はいつまでも平和で美しい星となれると僕は信じている。

僕はその時、「爆発しなかった爆弾」のおかげで今存在している。曾祖父から、百年の命を確かに僕は受け継いだ。僕は、曾祖父の喜びも苦しさも悲しさも詰まった百年という歴史を胸に秘めて、これからの未来の子や孫たちのために、あきらめずに生きる強さを持ち続け、命の輝きを伝えていきたい。

平和の鐘を全人類の胸に響かせていきたい。